■ 総合文化研究所年報　第28号（2020）pp.3－20

マイノリティーの生き方に学ぶ
「頑張る障害者」から「社会を変える障害者」へ

杉田　穏子

《要旨》

福島県郡山市で身体障害のある当事者が運営する「あいえるの会」で働く宮下さんと出会い、生きてこられた歩みについてインタビューした。特別支援学校の高等部を卒業後、一般企業に就職し、［障害のない人の社会で対等に頑張る障害者］であった。しかし出産を機に「支援が欲しい」という現実に出会う。いろんな福祉サービス機関をたらい回しにされ、［社会から障害を認識させられる経験］をする。その時、あいえるの会リーダー白石の「今はできないかもしれないけど一緒にやってこう」という言葉、車いすの集会で「生きづらさの問題をみんなで話し合えた」経験を経て、［重度の障害のある人が生活しやすくなることが大切という価値観］に変化していく。企業をやめ、［障害のある自分だからこそできる社会を変える障害者］としてあいえるの会で働くという方向に生き方を変えている。そんな宮下さんであるが、今でも自分の存在意義について考え続けている。しかし「健常者が言っても、やっぱり響かない。私とか障害のある人たちが言い続けないと」という言葉に「社会を変える障害者」としての宮下さんの確かな立ち位置を見た。

このような宮下さんの「アイデンティティの危機と再体制化」を支えたのは、子ども時代から大人を的確に批判できる自我の強さ、自分の目で確かめたことに対しては見方を変えていく柔軟さにあったと考察した。

キーワード：あいえるの会　頑張る障害者　社会を変える障害者　アイデンティティの危機と再体制化

1、はじめに　宮下さんとの出会い

2019年2月、本研究プロジェクトの一環として、福島県郡山市で活動する「あいえるの会」を訪ねる機会があった。あいえる（ＩＬ）とは Independent Living（自立生活）の略である。この会は、1970年代日本の障害者運動に大きな影響を与えた「青い芝の会」の元会長である白石清春がリーダーとなり、身体障害のある当事者が運営する会である。特定非営利活動法人あいえるの会のホームページには、「あいえるの会は『障がい者自身が障がい者問題の一番の専門家である』という理念を持ち、その経験をもとに『まち（地域）』

で生活をしている障がい者を支援し、どんな重度の障がい者でも、自らが望む生活ができるよう、様々なサービスや社会資源の情報の提供などをしています。」と記載されている。

今回の訪問が実現したのは、白石と本研究プロジェクトメンバー武居光が古くからの知り合いだったためである。訪問前に、白石から、現在「郡山市障がい者差別禁止条例」を作ろうとしていて、訪問の際にはその話し合いの場をぜひ傍聴してくださいというお知らせがあった。話し合いの場には、身体障害のある人、知的障害のある人とその親、複数の市会議員、一般の人など多くの人が参加し、活発なやりとりがなされていた。その話し合いの際、障害のある方々もたびたび発言されるのだが、脳性まひによる言語障害のため言葉が聞き取りづらい場面が何度かあった。その場面を実に上手に翻訳（？）しながら仲介してくださる女性、宮下三起子さんがおられた。

話し合いが終わった後、白石からあいえるの会について説明を受けたり、一緒に食事をする間、宮下さんは「学校では白石さんは悪者だって習ったんですよ」とか「私は本当はこんなところにいるはずじゃなかったんだけど」と明るく笑っておられ、この方はどんな歩みを経てここにおられるのだろうととても興味を持った。

そこで訪問を終える時、白石にできれば宮下さんにこれまで生きてこられた歩みについてインタビューさせていただきたいとお願いし、了解を得ていただいた。

その訪問から半年ほど経った8月のとても暑い日に再度郡山市のあいえるの会の事務所にお伺いし、160分に及ぶ長いインタビューに答えていただいた。

2、宮下さんへのインタビュー

前述したように、このインタビューは筆者が宮下さんの職場あいえるの会の事務所に伺い、事務所の中の相談室をお借りして行った。インタビューは基本的には宮下さんと筆者の1対1で行ったが、途中から白石が同席した。

なお、以下に示す宮下さんとのインタビューの記載の中で、（○○）の部分は筆者の言葉であり、［○○］は内容の理解のために補足した言葉であり、＜白石：○○＞は白石の言葉である。

（1）幼少期～高校を卒業するまで

宮下さんが生まれた時、障害があることを知った両親や親族は大きなショックを受けた。しかし、両親にも、「障害のある子は大事に育てなきゃならない」という母方祖母にも、たいへん可愛がられて育てられたという。そして少しでも障害を軽くしようという親たちの願いから宮下さんは5歳で施設入所することになる。親たちはよほど辛かったのだろう。父親はそのために転職したり、帰省したときには「私中心に動く」ほど大切にされたという。

うちのお父さん、結構大きな○○会社にいたんですよ。だけど、私が生まれることによって転勤ができないっていうことで、△△に変えたんですね、仕事

当時は1年に2回くらいしか帰れなかったので、夏休みと冬休み。だから、私は帰ったら天下でね。私中心に動く……例えば療育センターから帰ってくると、お父さん、何やってんだか分かんないけど［宮下さん補足：タクシーの仕事をしていて、多分夜勤を多くしていた］いつもいるのね……おじいちゃんおばあちゃんもいるの

一方、施設入所に納得できない宮下さんは、施設の中では心を閉ざしたまま、「一切しゃべんなかった」日々を5歳から小学校3年までをすごす。

私は療育センターに入れられることが、今まで環境がとってもいい環境だったのに……5歳で入所なので。そこに入らなきゃならない理由がよく分かんなかった……ここに入って何すんのかなっていうのが。だから、一切しゃべんなかった

私、結構泣いてたので、泣きべそだったからね……他のちっちゃい子たちもいるので、他の子に悪い影響を及ばすっていうことで……暗い倉庫みたいな所に入れられて。外に出されたりとか。そういうことしか記憶ないんです

小学校3年生から同じ病名の子どもがいたことをきっかけに養護学校（現在の特別支援学校）を「楽しいかな」と感じ、徐々に心を開いていく。

ただ、小学校3年くらいにあがったときに、ちょうど私と同じ障害の子が……いたんですよ。その子が……「なんでいつまでもしゃべんないの？」とか、「楽しいことはないの？」……そういう話をするようになってからしゃべるようになってきた

クラスの中では自分のように「しゃべれる子たち」と「脳性まひの人」とは「別」という意識があった。また先生たちのねじれた評価も、ますます生徒たちの「別」と言う意識を深める要因になったと思われる。

脳性まひの人とか……違う障害の人たちがクラスにはいたんだけど、正直、何しゃべってっか分かんないっていうのがあって。この人たち、大丈夫かなみたいな……何となくしゃべれる子たちが集まって……脳性まひの人たちはまた別っていうふうになってた……ちっちゃいながらに、この人たちとは遊べるけどこの人たちとは遊べないみたいな感じが自分の中にはあって。

私たちはそんなに頑張ってないんだけど……評価されやすいっていうのがあって。でも評価されるんだけど、ま出来て当然。例えば、同じクラスの脳性まひの人と私みたいな障害の人がいても、全然違う。対応がね。（すごくいいふうに評価される？）うん……だけど、こっちの重度の人たちは……できなくても、例えば2ミリくらい頑張ってればすごく評価される。（逆に？）逆に。

同じ子どもなのに、［宮下さんたちは］あまり目を向けられない。ほっといても、出来る人みたいな感じ。でも重度の人は、すぐに汗をかきやすいがから、一生懸命頑張っているよう評価されて。何か不公平？

このように5歳で施設に入所し、［障害のある自分］に出会っていくが、クラスの他の生徒との比較から［重度の人に比べれば障害の軽い自分］が意識されていった。

その後、養護学校の高等部に行っても「先はないな」と感じた宮下さん。高校は地域の学校へ行きたいと要求し、学力も「真ん中くらい」だったが「学校は階段がある」ため叶わなかった。仕方なく進んだ高等部の寮の中で様々な疑問を感じていく。そのような疑問を感じる基本は、「私の周りには障害ない人たちばっかり」の生活経験であったという。

常にトップレベルなので、このトップレベルの勉強と、お兄ちゃんとお姉ちゃんがいたので、その教科書は全く違うし、ここの高校に行ったところで先はないなって……なので、中学校の時に先生に、地域の学校に行きたい、高校に行きたいんだって言った……まずは学力テスト［宮下さん補足：当時の新教研］……結構真ん中くらいに私、いた……今、勉強してなくてこのレベルですよって。だから、もしかしたら勉強したらもっといけんじゃない？と思ったら、じゃあ、学校は階段があるし、私、階段駄目なんですよ……（まさに社会のバリアーがバリアーになるっていう、絵に描いたような話ですよね）そうなんです……階段とか、あと、おうちの人がやってくれんのかとか……お兄ちゃんお姉ちゃんたちは高校大学だったから、その辺どうすんだとかって言われて、じゃあ仕方ないからなと思って。

高校も取りあえずは入ったけど……ただ、おかしいことは、私、好きじゃなくて。例えば……生徒さんの中で……おうちからお金を持ってきたことがばれた……全体責任としてお小遣いはなしってなったんですよ。私、それはおかしくないですかって……あとは、その養護学校から帰ってきたら、食事の前にジャージーから普段着に着替えるっていうのが学校の決まりだった……寮母さんとか学校の先生と比べたときに、あなたたちだってずっとジャージーですよねって。なんで私たちだけがジャージーでいちゃいけないのかが分からない。それを説明できるんだったら私は直すけど、そうじゃなきゃないと直しませんとか。……重度の人たちも朝早く起きて布団畳みとかやって、遅刻なんですよ。それもなんかお

かしくないですかと。あなたたち寮母は何のためにいるんですか……テレビも……4台あるんだけど、チャンネルが決まってるんです……でも、誰も見てないときもあるから、別にどこのチャンネルを見てもいくないですかって……そういう変なことは嫌いだった……やっぱり見本となるのは障害ない人たちだったので、私の周りには障害ない人たちばっかりだから、なんで障害のある人たちだけがそのようにしなきゃならないかがよく分からない。

一方で小学校の時は自分とは「別」という意識であった「重度の脳性まひ」に対する考え方は同級生のＹちゃんとの出会いで少しずつ変化していく。

私、もともと脳性まひの人たちって変わってる人たちっていうふうに思ってたから。ただ、本当は頭良かったり、本当はもっといろんなことができるのにって思ったのは、私がちっちゃいときに出会った、もう亡くなっちゃったんですけど、Ｙちゃんっていう人がいたんです、うちの同級生に。その人はいつもよだれ垂らしてて、髪の毛短くって、男か女か分かんないような人だった……何しゃべってるか分かんない……「男なの？女なの？」っていうのを、私は正直に聞いてたりとか。「女なんだよ」とかって言って、「そう」とかって。（そういうふうにしゃべれるんです？Ｙちゃん。）しゃべれんです、ゆっくりだけど。「よだれ垂らしてっけど、何なの？」とかって、すごい聞いて（子ども同士だから）「うーん」とかって言ってて……その人は、私、とっても気になってて。テストとかも、その当時タイプだったから、紙、タイプライターにセットするだけで40分終わっちゃうのね。聞くと全部答えられんですよ。私、これって（おかしい）不公平でしょっていうこととか。私なんか10分くらいでちゃっちゃってやって、あと寝てんですよ。だけど、その人はそれだけ、名前を書くだけで1時間終わっちゃうから、いっつも怒られてばっかりいたのね。だから、私、障害がある人たちが入る学校なくせして、なんかひどい（本当だね。全然合わしてないですよね。なんの配慮も）そう、ないので。だから、その頃からなんか変だなっていうのはあったの。

(2) 企業就職での社会人としてのスタート

高校を卒業後、父親がなくなったこともあり、母親の強い希望で実家に帰った宮下さん。障害者枠で企業就職をする。「全く興味ない」仕事だったが会社の人はいい人で、楽しい社会人としてのスタートだった。ここでは［障害のない人の社会で対等に頑張る障害者］として、十分に対等にやれる自分を発見していったのではないだろうか。

しかし母親との関係の悪化、会社の仕組みへの疑問、結婚の悩みを次第に抱えるようになった矢先、「26のときに会社で転んで骨折」し、「なんかが切れた」という。

たまたま企業が障害者雇用枠で空いてたので、そこに入った。そのときの担任の先生から

言われたのは……ここを辞めるっていうことはまず考えないでくださいっていうことと……ちゃんとまじめに仕事してくれれば、下の子たちも続けられるから、きちんとまじめにやるようにって言われた。

全く興味ない［仕事な］のに……会社の人が結構、みんないい人ばっかりで……社員旅行とか結婚式呼ばれとか……みんなに迷惑掛けるから行きたくないって言うんだけど、そんなに気にしてんの？みたいな感じ……今でもやりとりはしてんですけど、就職は良かったです。……［仕事は］朝の8時半から11時とか。（夜のですか）うん。それからみんなで飲みに行ったりとか。別に、私1人だけがやってたわけではなくって……15時間くらい働いてた……休みのときも、みんな友達と遊びに行ってたりとかしてた

10年勤めたんですけど、同期の方とかが結婚してくじゃないですか。私、結婚できんのかなとか。あとは、企業って人間的にいい人が飛ばされたりとか、ずる賢い人が出世してったりとか、そういうのを本部だったので結構見えてくる。……そうすると、せっかく人間的にいい人が辞めてって

親とも毎回けんかしてたし……私、結構風呂介助とか着替え介助とか、手伝ってもらわないとできない……そうすると、お母さんも結構疲れてて。おまえも少しは協力しろみたいな。例えば、毎日遊びに行くたんびにいろいろ着替えしてとかって言われるから、私だって私の生活があんだからみたいな感じでお母さんが言うから、私は私で、やっと反抗期で、「だったら私を生まなきゃよかったでしょ」とか。「私だって……好きで障害者やってんじゃないんだから」とか。

ただ､26のときに会社で転んで骨折したんですね。そのときに……なんかが切れたんでしょうね……あとは、お母さんと毎回激しくけんかしてるから、これ、お母さんが万が一なんかあったときに、この代わりは誰がやるんだろうって思った……骨折した時に初めて、このままではあんまりいい結果にならないなと。

たまたま……○○さん……が結婚したっていう話を（女性の方ですか）はい。重度の脳性まひの人が結婚したって聞いて、ちょっと待てよと。私はずっと障害のせいで結婚できないと思っていたのに、それが理由ではない。障害のある人も結婚してるわけでしょ、私より重度の人が結婚してるから、やっぱり性格かなって思った……［親との暮らしを］やめなきゃなんない。

(3) 実家を離れ2回目の就職、結婚そして出産

実家をでようと思った宮下さんは大手の製薬会社に雇用され、郡山で一人暮らしを始め

る。しかし思っていたより寂しい。かつての同級生と集まるようになる。気になっていたＹちゃんとも再会。学校の先輩と結婚もする。そして出産。抱っこ、おむつ交換などをしなくてはならない現実に、「子どもが生まれて……初めてできないことにぶち当たった」、「初めて自分が障害があるんだ」と思ったという。この時［社会から障害を認識させられる経験］に初めて出会っている。

ちょっと他の市町村に出ようと思ったんです……たまたま郡山の大手、○○製薬が就職していいですよって言われたので……アパートを見つけんのも……最初は大変だったんです。だけど、○○製薬に職が決まったって言われた瞬間にすぐ貸してくれて。（すごいね、社会って。なんかもう。）すごいですよね。

そのときに、私、ずっと気になってたのは、Ｙちゃんっていう同級生……私は、休みのときに毎回会社の人と遊んだり、飲みに行ったり……重度の人たちって何やってんだろうって……一人暮らししたら思ったより寂しくて……養護学校の友達からまず探してったら……私、離婚しちゃったんですけど、だんなと出会って……その重度のＹちゃんとか同級生とか、休みのときに呼んだりして

結婚して子ども生まれたんですけど、初めてできないことにぶち当たった［今までは］頭洗うこともできなくったって、着替えすることができなかっても、工夫すれば何とかできることもあった。あとは、だんなもいたので何とか手伝ってもらえてた……だけど、子どもが生まれたとき……初めてできないっていうことをぶつけられるわけですよね。……育児ですね。だっこはできないし、おむつ交換とかもできないし、いろいろできないことがいっぱい……私、初めて自分が障害があるんだっていうことをそのときに思う……私は何とかなると思ったんですよ。今まで何とかしてきたので何とかなるんじゃないかと思ってたら、やっぱり何とかならなくって。○○さんっていう人も同じく結婚して、同じ子どもがいるんだけど、その人は実家に帰ったんですね。でも、私は……お願いしますって頭下げんのも私的には許せなくって。でも、お願いするしかなかった。

(4) 育児に困り、そして「あいえる」と出会う

育児に困った宮下さんは初めて福祉事務所に相談。しかし宮下さんが求めるようなサービスはないと言われ、4カ所をたらい回しにされる。最後に紹介されたのが「あいえる」。白石と出会い「今はできないかもしれないけど……一緒にやってこう」と言われる。はじめはサービスが必要なのは「今」なので「違う」と感じ、1年だけ母親に頼る。しかしたらい回しにするだけの福祉サービス機関への疑問、自分が我慢すれば後に続く人も同じ思いをする、自分も障害を持ちながら何もしてこなかった、と感じ、次第に「今はできないかもしれないけど」という白石の言葉や考え方に惹かれていく。ここで［生き方を変える

白石の言葉との出会い］があり、自分とは一見関係のない［重度の障害のある人が生活しやすくなることが大切という価値観］に変化していく。

障害福祉課……子ども家庭相談所……社会福祉協議会……ボランティアセンターに行って……最終的にボランティアセンターさんが、ここでもできないから……オフィスあいえる。「……障害のある人たちがいるから……何かしてくれんじゃないの？」って言われて……行ったらば白石さんがにこって笑って、「……大変だな……今はできないかもしれないけど一緒にやってこう」って言った……でも……「えっ？　私、ここ？」って……また白石さんがにこにこしながら、「今はできないかもしれない」。「いや、だから違うから、今なんだ!」って言って。

仕方ないから、ここに相談しても駄目だと。お母さんに頭を下げてするしかないと思って、1年間は頭下げたんです。でも……ここで私が泣き寝入りっていうか、仕方ないよねって言ったら、多分、この後続く人たちも同じことになるはずだと……あとは、たらい回しにされたでしょう……この人たち、なんで仕事してんだろうって思って。

白石さんたちもやっぱり気になってたんです……今はできないかもしれないけどっていう、この言葉が気になってたんですよ。何となく自分も障害を持ちながら何もしてこなかった……自分が企業で働いていて……私なりに頑張ってた部分はいっぱいあった。でも、私1人がやったところで世の中は動かないんだ。重度の障害のある人たちと一緒にやるのは、私は本当は嫌いだけど、でも、重度の障害のある人たちが生きやすくなれば、私も生きやすくなるはずだと思った。

社協から言われたことが、私……手帳持ってるんですけど、「宮下さん、1種1級の手帳持ってるからといって受けられるサービスじゃないんだからね」って言われたときに……じゃあ、福祉は何をやるとこですかっていうところが……でも、そう言いながら私自身も何もやってなかったわけだから、絶対やるって思った……白石さんたちと出会って……全国に連れていかれて……自分の勉強なので半分は自分で出せとか。こんな、企業にはあり得ないような仕打ちがここで待っていた。

宮下さんの場合は、一般企業でも、一人暮らしでもなんとか頑張って生活を成り立たせてきた。しかし子どもを産んで、初めて「できない」「支援が欲しい」という現実に出会う。いろんな福祉サービス機関をたらい回しにされ支援を求めるが、どこにもサービスはないと言われる。そんなとき白石だけが「今はできないかもしれないけど一緒にやってこう」という。はじめは理解できなかったこの言葉がずっと心の中に染み込んでいく。「自分が今我慢すれば次の人も同じ目にあってしまう」「自分も障害がありながら、では障害のあ

る人のために何かをしてきたのか」「自分が一般社会で頑張っても何も変わらない」……様々な思いが宮下さんの価値観を揺さぶっていったのではないだろうか。それまでは［障害のない人の社会で対等に頑張る障害者］が、生きていくうえで大切な価値観だった。しかしこれらの出来事を通して、［障害のある自分だからこそできる社会を変える障害者］が、宮下さんにとってより意味のあるものになっていったのではないだろうか。

その後、大企業をやめ、「あいえる」の考え方に惹かれていく。私生活では、「頑張る障害者」の考え方の夫との間に溝ができ離婚する。そんなとき車いす市民全国集会で、「生きづらさの問題をみんなで話し合えた」「すんごい楽しく」「私がいくら言ったところで変わんないことが次々変わっていく」という感触を得て、「あいえるで火がつきましたね。ぼおって」というぐらい今までとは違う自分、違う価値観に出会っていく。

……向こうから別れましょうと。それは、私、あいえるに出会ったのも一つの原因だったと思います。私……頑張る障害者、ずっとやってきたので、橋本さんとか白石さんたちは……何となく、駄目な障害者……何となくそういうイメージが私の中にはあって……その考え方を変えるのにかなり時間かかりました……結局そう言いながらも全国のいろんな障害のある人たちと出会って、私が今まで30年間生きてきたものって何だったのかなって……結局は子どもが生まれたことに対しても誰も手をさしのべないっていうことを考えたときに、不公平っていうか。でも……私がただ文句を言ってても変わんないって思った……それであいえるに、白石さんが「3万だけど」って言われたけど、ちょっとやってみようかなって。……どうしてもＹちゃんっていう友達のことも気になってたし、そういういろんなことですね。

（こんにちは）＜白石：寒いですね。＞ちょうど白石さんとの出会いのとこまで来ました。……実は、白石さんはうちのだんなに手紙も書いたんです、離婚する時に……結局あいえるで関わって、頑張る障害者やめようって思ってたら、うちに帰っても頑張んなくなっちゃったから……例えば、朝早く起きて料理作ったり弁当作ったり……やんなくなってきて。みんな……介助者使って食事作ってもらったりしてんのに、私だけがこんな奴隷みたいなの、嫌だと思ってて。ちょうどそのときに、車いす市民全国集会って大きな大会が……あったから……それが結構面白かった……障害のある人たちが我慢しなくって……生きづらさの問題をみんなで話し合えたり……私がいくら言ったところで変わんないことが次々変わっていくから、すごく楽しかったんです。こっちの頑張るだんなは……できんのになんでヘルパー使わなきゃなんないんだとかって言われるから……一緒にいるのが嫌だったの……私がもともと持ってる力なんだけど。でも、それがだんなとの離婚になっちゃったから、白石さん、申し訳ないねっていうことでだんなにお手紙を書いたんで……多分、私、白石さんに会う前から、きっとうまくいかないなって思ってたんです……あいえるで火がつきましたね。ぼおって、火が。そうなんです。

(5) あいえるでの仕事

その後、やりたかった相談支援事業を始めた宮下さん。たらい回しにされた経験からたらい回しにしないこと、研修に当事者が参画することに意味を感じてやり始める。「言ってける障害者の人たちを増やしてくのが早いのか」「障害のない人たちの意識を変えたほうが早いんじゃないか」と。しかし10年間やるが「どちらも駄目」でも「そこをもっと……引っ張っていこう」という。

> その後、市町村障害者生活支援事業って国の相談支援事業が……私、相談事業をやりたかったので、たらい回しだから……こんないいかげんな公務員ばっかいるんだったら私がやると思って、「相談支援事業。やりましょう」って言って……障害のある人同士のピアっていうのは有効かな……ただ、それだけではやっぱり駄目で、そこに社会福祉士という専門職の人とかが付いてこなきゃなんないのかなとは思うけど。

> ……私は白石さんのやってきたことも大事だと思ってるけど、どっかで障害のある人たちだけがやっても社会全体は変わらない……いつも私、ちっちゃいときから障害のある人とない人を比べるから、「それは比べることないんだ」って白石さんは言うんだけど……障害のある人たちをうまく使って働いてる人たちは、権利を保証しようと言いながら、一番、その大事なときに来ない。例えば、行政交渉とか、あとは、厚労省に当事者が行くっていったときに、来るのは当事者ばっかり……相談支援も、当事者の相談員、私は大事だと思ってんです。ましてや相談員のケアマネ研修に当事者が参画してなかったら、この研修はやる意味がないって私は思ってて。そこには私も入っていこうと思って入ったんです……言ってける障害者の人たちを増やしてくのが早いのか、……障害のない人たちの意識を変えたほうが早いんじゃないかと思って研修を10年間やってきたんですよ。でも……駄目なんですよ。＜白石：どっちも駄目だ＞どっちも駄目なんです……そこをもっと白石さんと一緒に引っ張っていこうと思って……白石さんにはあと30年は生きてもらわなきゃ。

(6)「障害のある人」と「障害のない人」の分かりあえない部分

宮下さんは常に「障害のない人を変える」、「障害のある人を変える」どちらの視点も視野に入れつつ、活動しているのがよくわかる。その宮下さんは「障害のある人とない人が100％わかりあうことはあり得ない」し、「障害あるからこそわかることがいっぱい」だし、障害のない人には「分かってほしくない」ところがあるという。

> 障害のない人たちと対立、この福祉行政関係とも対立しなきゃなんないときは対立しなきゃならないと思いますね。……障害のない人たちと障害のある人たちが100パーセント、ともに分かち合うっていうのは、私はあり得ないと思っていて。でも、一緒に生きてかなきゃなんない部分は一緒に生きてかなきゃなんないけど、でも、障害があるからこそ分か

ることっていっぱいあって。そこまでは入ってきてほしくないっていうのが私はあって……どう説明したらいんですかね　＜白石：対等じゃないんですよ。＞対等じゃないから……みんな対等にしていきましょうって言うけども……対等じゃない部分はいくら頑張っても対等になれないから、そこは放っといてっていうか……障害のない人たちが関わんなくてもいいところ……障害のある人たちの、白石さんで言うと文化なのかもしれないけど、そこは私もここまでは分かってほしくないっていうか……分かったって言われちゃうと、今度対立になるから、いいのよって。私は私でこうやって生きてきたことは皆さんに伝えるけど、でも、ここの部分っていうのはいくら話しても、何か支援してほしいわけではないし、私は私でここの部分は置いておきたいっていうのが、私の中にも、多分みんなあると思う。

(7)「障害があるのはなんで私だったんだろう」という問い

一方で、いまだに障害があるのは「なんで私だったんだろうっていうのが…ある」という。「いろんな意味で不便」でも「私はこうやって生きてる」「私がこの社会に生きてる意味ってなんなのか」と自分の存在意義について深く考えている。しかし「健常者が言っても、やっぱり響かなくって……私とか白石さんとか、障害のある人たちが……言い続けないと」というところに宮下さんの大切なメッセージが込められていると感じた。

私、障害のない人たちばっかりの中で育って、ちっちゃい時から、幼少期いるので、親が悪いわけではないんだけど、なんでここに私がいるんだろうっていうのがあんですよね。……遠回しにみんなは……神が定めたんだとか言われるけど……障害を否定してるわけではないんだけど、なんで私だったんだろうっていうのが……私という存在を……否定してるわけではないんだけど……いろんな意味で不便なんですよ……あとは、社会からいろいろ見られたりするときに……私はこうやって生きてる……本当にここに生きてていいのかな……でも、生まれてる以上は何かやんなきゃなんないのかなっていうのはあんですね、多分。障害なかったら……避けて生きられるわけでしょ……障害なかったらもっとすごい大変な生活をしてたかもしれない……ただ、なんでここに私という人間がいるんだって……私がこの社会に生きてる意味ってなんなのかなとか……自分がせっかく生きてきてんのに何のために生きてきたんだろうっていうことを思うのは、やっぱ不便だからなんですよ、きっとね。だから、そこの不便なところがもうちょっと生きやすくなればいいんじゃないかなって……それが一人じゃないから、障害のある人たちは一人じゃないので、そこのところが、あいえるでそういう仕事ができるんだったら私はいいなと思ってるんです……あいえるの大事なことはこういうことなんだって健常者が言っても、やっぱり響かなくって……私とか白石さんとか、障害のある人たちが……言い続けないと、多分忘れるっていうか……私はそれがやりたくて入ってきてるので。ただ、そうは言いながら私もふらふらして、まったく障害者は嫌だなって思うときもありますけど……ぴょんぴょん跳ねた

り動けたり、いろんなことを誰の手を借りずにやれるっていうのはうらやましいなって思うときが、○○［子どもの名前］を見てて思いましたね。こいつ、何もできなかったくせに自分で歩けるようになって、着替えも自分でできるようになって、生意気なことも言うようになって。今は社会人になって、やっぱり動けるっちゅうのは大したもんだなとか。

3、宮下さんのインタビューから学ぶこと

（1）障害のある人同志の「差別性」と「通じ合い」

宮下さんのインタビューを終えた翌月の2019年9月、生活書院から『往き還り繋ぐ　障害者運動　於＆発　福島の50年』（青木ら、2019）が出版された。これは青い芝の会、中でも福島県での白石たちの活動の軌跡を描いた著書である。筆者は白石にお会いしたばかりであったこともあり、とても近しい人たちの話としてこの著書を読むことができた。中でも白石たちの同級生である鈴木絹江のインタビューを読んだ時、宮下さんとの多くの共通点を感じた。著書の中に紹介されていた鈴木のインタビューを短く紹介したい。

鈴木は、白石と郡山養護学校で同級生だった人である。障害の軽かった鈴木も宮下さんと同様に、重い脳性まひのある白石たちを「重度の人」「自分のことが自分でできない」「世界が違う」存在として見ており、［重度の人に比べれば障害の軽い自分］が意識されている。

> 中1、2年…［養護学校に］重度の人を入れていこう［という方針で］‥‥白石くん、橋本くん……自分で自分のことができないみたいな、お尻もふけないみたいな、そういう人たちが入って来て……やっぱり彼らは落ちこぼれだね。……私たちは勉強で一般社会について行くとか、一般社会に就職して行くとかそっちを目指した……あの人たちは最初からぶら下がりもできないという、本当にレベルっつか世界が違う
> （青木ら、2019、84-5、［　］は筆者の補足）

鈴木は養護学校からただ一人一般企業へ就職した。この点も宮下さんと共通している。ただ宮下さんの場合、会社の人はいい人たちで社会人として順調なスタートだった。しかし鈴木の場合は、朝6時から夜12時まで働き、過酷な労働条件であった。しかし社長はクリスチャンでもあり話したらわかってくれるのではと希望を持っていた。そんな矢先、鈴木のことを誰かが社長に告げ口し、社長から罵声を浴びせられる。ここで初めて［社会から障害を認識させられる経験］をしている。「ぺしゃんこ」「粉々」になりながらも、次は編み物で生計を立てるという驚異の頑張りを見せ、［障害のない人の社会で対等に頑張る障害者］はなんとか維持されていく。

> 「おまえ何様のつもりだ」「びっこに何ができる」……「…雇ってやっているのに」……

人生で一番ショック……悲しさを超えてあざわらっちゃった……ぺしゃんこ……粉々にされて、人を信じることができない……自分もそういう風に言われて、そうじゃないと言えない自分……それでも働き続ける……編み物で生計を立てる。……普通の人は四年ぐらいで一級の資格……二年くらいで……とった……一日一枚のペース……きつい。朝8時から夜中の12時まで手から編み針をはずさない。……専門級とったら、看板をあげることができて……店の下請け……生徒をとって……
（青木ら、2019、96-7）

そんなある日「事件は起きた」と鈴木はいう。駅でカンパをする白石たちを見て「やだな」と思う。でもそこで「私だって……障害者っていうふうに思われてる。それを、私は彼らに向けた」という自分に向けられた差別性と同じ構図を自分も「彼らに向けていた」という「自分の差別性」に気づいていく。

福島駅で白石くんとか橋本くん……カンパお願いしまーすって、こじきの格好……もう本当に汚い……やだな、見たくないな……知らんぷりしてちょっと端の方から……避けて通って……でもそこで立ち止まって、何で彼らを「やだな」と思ったのかなと、養護学校で一緒だったのに……社会から障害者……私だって差別されて障害者っていうふうに思われてる。それを、私は彼らに向けたわけですよね。自分の差別性……「なんで何だ」……自問自答……彼らを避けるっていうのは一般の人が私を避けるのと同じような構図なんじゃないか……「それでいいのか」って……「こんにちは」ぐらいの挨拶はしよう……ヤクルト買って……「久しぶり」……白石くんが「ありがとな、ありがとな」……「またな」って言いながら別れた
（青木ら、2019、98-9）

その後、鈴木は青い芝の会の運動に関わっていく。しかし、最初のころは、違和感があり、働かずにカンパをもらって生活することが「自立」とは思えなかった。そんな時白石に「障害者は、生きてることが労働だべ」と言われ、「すごくほッとした」、「重度の障害者が幸せでなかったら、ほんとの幸せなんかないんだ」と言われ、「すこーんって思っちゃった」という。このようにして「生き方を変える白石の言葉」と出会い、［重度の障害のある人が生活しやすくなることが大切という価値観］に変化していく。自分よりはるかに重い障害と向き合いながら生きてきたことを中学時代から知っている白石の言葉は、鈴木の心の奥深くにしみ込んでいったのではないだろうか。

私は、白石に言われた……「障害者は、生きてることが労働だべ」……私、すごくほっとした……おまえは、生きていることだけで価値があるんだって彼は言ってくれた……その言葉はでかかったね……生きていること……それだけでおまえは十分なんだぞって、障害

者だれにも言われてきていない……自分の存在意義を……見つけるということが私にとってすごい大変……生きていることが労働なんだ……その言葉にくらっときた……心の奥底からの叫び……障害者の本音……「おまえみたいに働けるから、手先のところで働いて、働いているって言うことが重度の障害者を追いつめている」ってことをいわれたんだよね……重度の障害者が幸せでなかったら、ほんとの幸せなんかないんだって……白石が言った。……それはほんとにそうだなってすこーんて思っちゃた……重度の障害者が生き生きいられる状態になかったら……私たちにとってもいい社会じゃない……自分の生きてきた苦しみとか、自分はがんばってがんばってがんばったんだけど……それって……障害を見ないで生きてきたのよね。……障害のあるちっちゃな身体でそんなに働いたらね……挫折するんだよね。
（青木ら、2019、100-01）

毎月1回……街頭カンパ……その後の、飲み会がおもしろくて……楽しみだった……あそこが私のアイデンティティ……自分の居場所……みんな本音でぶつかってた……着飾らなくてもいいというかね……二四くらいまでに大きな出会いがあって……大きな運命の別れ道になるだろうなって思ってたのね。で、そのときにきたのが白馬の王子様ではなくて車椅子に乗ってきた（笑）、障害者だったわけだね。
（青木ら、2019、102-03）

白石たちと再会したのは、街頭カンパであり、その時には見ただけで「カンパお願いしまーすって、こじきの格好……もう本当に汚い……やだな、見たくないな」と思っていた鈴木が、「毎月1回……街頭カンパ……その後の、飲み会がおもしろくて……楽しみだった……あそこが私のアイデンティティ……自分の居場所」だという。いかに大きな変化だったのかを窺い知ることができる。その後、鈴木も白石たちと共に青い芝の会の運動に傾倒していく。「障害を見ないで生きる」ことをやめ、［障害のある自分だからこそできる社会を変える障害者］として自分の居場所を見つけていった。

このように鈴木と宮下さんのインタビューからは、共に

①［障害のある自分］→
②［重度の人に比べれば障害の軽い自分］→
③［障害のない人の社会で対等に頑張る障害者］→
④［社会から障害を認識させられる経験］→
⑤［生き方を変える白石の言葉との出会い］→
⑥［重度の障害のある人が生活しやすくなることが大切という価値観］→
⑦［障害のある自分だからこそできる社会を変える障害者］

という価値観の変化を読み取ることができる。障害の軽度であった鈴木も宮下さんも養護学校では②にみられる障害のある人同士の「差別性」、そしてそれに基づいて③のような価値観が形成されていく。しかしその後④、⑤のような経験の後、⑥、⑦のように価値観が大きく変化している。そこには障害のある人同士の深い「通じ合い」の軌跡を見ることができる。そのことが、宮下さんのいう「障害のある人とない人が100％わかりあうことはあり得ない」し、「障害あるからこそわかることがいっぱい」だし、障害のない人には「分かってほしくない」ところがあるという言葉につながっていくのかなと思う。

そして、当たり前のことかもしれないが、誰もが最初から「青い芝の会」や「あいえるの会」に所属していたのではなく、一人ひとりが白石たちの価値観に深く出会いながら行動を共にしていったことも実感として学ぶことができた。

⑵ アイデンティティの危機と再体制化：「頑張る障害者」から「社会を変える障害者」へ

宮下さんが上述の①から⑦へと変化していくことはどのように生じていたのだろうか。いろいろな捉え方があるだろうが、「アイデンティティの危機と再体制化」ととらえることもできるだろう。岡本（2002）は、「アイデンティティ達成のレベルは、まず、アイデンティティの危機にいかに深く気づき、体験し、そしていかにしっかりと主体的に再体制化できたかでとらえることができる」としている。そのための重要な要素として、危機を認知する力・危機に対応する力を挙げている。まず危機を認知する力については、以下のように述べている。

> 大人の人生には、いくつかの発達的危機期が存在する。その危機期とは、今までの自分のあり方や生き方、つまりアイデンティティではもはや自分を支えきれない、これから自分らしく生きていけないということが自覚される時期である。この認識からアイデンティティの見直しと組み替え、つまり再体制化が始まるわけである。この危機の自覚によって、新しい状況に応じた自分のあり方を模索し、これまでの自己の中に再統合していく。この「危機の認知→主体的模索→再体制下（再統合）」のプロセスの中で、アイデンティティはより高いレベルに発達していく。
> （岡本編、2002、77）

宮下さんの場合、子どもを産んで、初めて「できない」「支援が欲しい」という現実に直面し、「子どもが生まれたことに対しても誰も手をさしのべない」社会への疑問、これまでの「頑張る障害者」という生き方では自分らしく生きていけない、「自分が一般社会で頑張っても何も変わらない」という内的危機が自覚されていった。岡本（2002）はそのような危機に対応する力については次のように述べている。

> その自己の内的危機を契機に、アイデンティティを問い直し、再統合していく力が重

> 要であろう。その問い直しの作業の中で、自分の影になっていた部分や欠落していた部分、つまり過去においてやり残した課題や納得できないところ、さらには生きられなかったもう一人の自分、もう一つの生き方が再吟味されていく。そして、それが現在の自分とこれからの生き方の中で補填され統合されていくわけである。
> （岡本編、2002、77）

宮下さんの場合は、問い直しの作業の中で、たらい回しにする福祉サービス機関に「福祉は何をやるとこですか」という怒りを覚えながら、同時に「自分も障害がありながら、では障害のある人のために何かをしてきたのか」という問い、「自分が今我慢すれば次の人も同じ目にあってしまう」という次世代の人に目を向けた問いと向きあい、つまり岡本のいう主体的模索をしながら、「私自身も何もやってなかったわけだから、絶対やるって思った」「あいえるで火がつきましたね。ぼおって」と主体的に生き方を変え「頑張る障害者」から「社会を変える障害者」へ再体制化されていったのではないだろうか。

> このアイデンティティの危機を認知する力とその危機に主体的に対応する力は、自我の強さや柔軟性が基盤にあることは言うまでもない。人生の岐路に立った時、いかに深く自分の内的変化に気づき、主体的に自分の生き方を考えることができるか、これが真にアイデンティティを達成していくための要であると思われる。
> （岡本編、2002、77-8）

宮下さんの場合、再体制化の基盤となる自我の強さと柔軟性が十分に備わっていたと思われる。それは「おかしいことは、私、好きじゃなくて」、「変なことは嫌いだった」という子ども時代から大人を的確に批判できる自我の強さに現れている。例えば、「おかしな規則で子どもたちの生活を管理したり、重度の子どもの布団畳みを支援せずに遅刻させている施設の寮母さん」、「聞くと全部答えられる能力を持ちながら、紙をタイプライターにセットし、名前を書くだけで1時間かかるＹちゃんを怒ってばっかりの養護学校の先生」に向ける的確な批判である。一方で、「もともと脳性まひの人たちって変わってる人たちっていうふうに思ってた」けれどもＹちゃんと生活を共にするうちに「本当は頭良かったり、本当はもっといろんなことができるのにって思った」と自分の目で確かめたことに対しては柔軟に見方を変えている。このような宮下さんであるから、「主体的に自分の生き方を考えることができ」たのだろう。

そんな宮下さんであるが、今でも「障害があるのはなんで私だったんだろう」、「私がこの社会に生きてる意味ってなんなのか」と自分の存在意義について考え続けているという。しかしインタビューの中の「障害のある人たちは一人じゃないので……あいえるでそういう仕事ができるんだったら私はいいなと思ってる」「健常者が言っても、やっぱり響かなくって……私とか白石さんとか、障害のある人たちが……言い続けないと」という言

葉に「社会を変える障害者」としての宮下さんの確かな立ち位置を見たように思う。

4、おわりに

宮下さんのインタビューについてまとめてみたが、今回の論文では、宮下さんの幼児期からあいえるの会に来られるまでに焦点を絞ってまとめたため、その一部しか紹介できなかった。実際のインタビューではこの他に、養護学校で宮下さんたち生徒は先生から「白石たちが来る同窓生の部屋に立ち入り禁止」が言い渡されていたこと、橋本広芳さんのこと、障害者サービスや制度ができればできるほど障害者は地域や人々から隔離されていく矛盾、障害者サービスと高齢者サービスについての考え方などを伺ったが、今回は私の力不足で記載することができなかった。今後の課題としたい。

宮下さんと出会って、お話を伺い、一番感じたことは、常に自分で考え、深く悩み、行動に移していく姿と、それを実に楽しそうに正直に話される姿である。まだまだ宮下さんの魅力をまとめきれない部分も多くあるが、このインタビューに協力していただいたこと、宮下さんの生き方に多くの学びを得たことに感謝している。

宮下さん、そして宮下さんのインタビューの承諾を取ってくださり、インタビューにも途中から同席してくださった白石清春さん、ありがとうございました。

引用文献

1） 青木千帆子、瀬山紀子、立岩真也、田中恵美子、土屋葉著『往き還り繋ぐ　障害者運動 於＆発　福島の50年』、生活書院、2019
2） 岡本祐子編著『アイデンティティ　生涯発達論の射程』、ミネルヴァ書房、2002
3） 特定非営利活動法人あいえるの会のホームページ（http://aierunokai.com/）（最終閲覧日2020年8月15日）

Learning from the Lives of Minorities
Evolving from a Person with Disabilities Who Is “Doing Her Best” to One Who Is “Changing Society”

Yasuko SUGITA

I interviewed Mikiko Miyashita about her life. She has a disability and works at Aieru no Kai, which is run by the disabled in Koriyama city, Fukushima. Miyashita graduated from a special education school. Employed by a regular company, she became a disabled person doing her best within an “able-bodied” society. When she became pregnant, however, she wanted support. Being shunted from one welfare agency to another made her conscious of her disability. Aieru no Kai leader Kiyoharu Shiraishi told her, “It may be impossible now, but let’s work on this together.” His words and being able to talk about the difficulties at gatherings for people in wheelchairs changed Miyashita’s values. She realized the importance of making society a better place for people with severe disabilities. Quitting her job, she began working at Aieru no Kai, becoming a disabled person changing society. It was her disability that made this possible. Whenever she questions the meaning of her existence, she remembers that her words have more impact than those of the able-bodied. “People with disabilities like me have to keep speaking up,” she said. Clearly, she has established herself as “a disabled person changing society.”

Miyashita’s high ego strength, which from childhood allowed her to appropriately judge adults, and her flexibility, which allowed her to change her perspective through experience, supported her through her identity crisis and reorganization.

Keywords: Aieru no Kai, a disabled person doing their best, a disabled person changing society, identity crisis and reorganization